

汲古一紙

『歌集・境涯を前にして』(一)

中村素堂

この間、なにかのついでに老妻が、「あなたと話をしていると、仏さまのことにふれる話の出ない日はない」と笑っていたが、どうも仏さまとは深いご縁になってしまったらしい。

その仏さまのことで、宗祖の提唱された途から少しでも考えの違つたものは、異安心といつて斥けられている。が私はこの異安心でない信仰を持っている人は、正確な意味でいって少ないのではないかと信じている。

十人寄れば十色、人の性格は全く微妙に食い違っている。

同じ芝居を見ている、涙もろい人氣の強い人、人生経験の中で辛い思いをした人、幸福すぎる人、それぞれ受けとり方が違い感銘に深淺はあるものだと思う。戦争を経験した人、経験しない人、戦火にあった人、遭わない人などと比較すると、書物一冊を読んでも新聞のペトナム記事についても、その感慨に大変な違いを見出すのはなんぴとも首肯するところだ。

一首の歌を詠んで感動するのも、全く相似たものがあるようだ。万葉などを読んでいても、

いはしらの浜松が枝をひきむすびまささくあらばまたかへり見む
家があれば筍にもる飯を草枕旅にしあれば権の葉にもる

などという有馬皇子の歌が、少年のころに旅行詠のひとつのようになっていたのと、後年註のあるものを読む年令になって、殺されにゆくような旅の歌と判つてみると、後者の歌などは到底むかしの旅行の不自由さを詠つたものだった教師の解釈など、浅いなどという程度のものではないと知った。

私はごく若い時分、東京市立の商業学校つまり今の商業高校の教員をやつていて、はた目にはよさそうな教員生活の楽屋が判つて、十一ヶ年もよく勤めたものだと感じるけれど、魅力のあるよい先輩と同僚が少しいたため、月給が欲しいだけではとてもいられた

ものではなかった。

そのころにFという英語の教師が、高等女学校から転任してきて、マアそれでも男子校は女子校よりも気分がよいなどというものだから、嫌気のさしたところへ活を入れられたり、若輩の動揺する心を把えてくれたある宗教家に鍛えられつつ何となく辛抱してきてしまったのである。

その後戦争の暴風雨に遭っていたような時代を兼任の学校はやめて専心忠実な官吏のはしくれとして過ごし、完全に燃え尽くされた東京都の街に戦後の学校復旧が始められると、私はまた誘われるままに、自分の生活の復興のためにも資金があるので、いつかの学校に勤めるようになった。

教室から帰ってきて、放課時間に休む椅子もないバラック校舎のある女子高校で、先輩の英文教師として活躍しておられた清水乙女先生に初めてお目にかかったのである。

しかし教科目の違いもあったりして、あまり親しかつたのではないが、震災に遭つた者同士、先生は群馬県の方からの通勤、私は家族を宮城県に疎開させて浦和の仮寓から出てくる、という同病の憐むに似た話から親しくなってみると、先生は短歌人、私も道楽みたくに時々やつているというので、何かと引き廻していただいているうちに、筆誌ははじめていたようであつた。

ちようどその時分から、その勤め先の女学校は何かと権力伸張の争いみだいなものや、気むずかしい上司が来たりして、とてもうつつとうしい雰囲気の中で、経営もとつおいだつたり、人事も困難な問題があつたりした時、清水先生のような長い勤務歴と幅の広い実力が生徒をひきつけておられた方にとっては堪らなく嫌であられたようで、渦中に入らないようにしても不愉快な毎日のように積つていったとは目にも判るようになった。

そして私もそのような空気はひどく嫌いなので、そつと退任を願ひ出ると、先生は先生で時を同じうしてやつぱりやめておられたのである。(つづく)